

清狂會月性上人活動寫眞攝影趣意書

妙圓寺第十八世住職 深井信雄

妙圓寺第十世住職釋月性、身は方外に在つて而も其精神に至つては諸侯、士大夫も遠く及ばざるものあり、其證枚擧に遑あらずと雖も近くは山縣公爵の月性碑文に明なり曰く前畧『當是時堂々三百諸侯中能明大義明分者寥寥乎如晨星也ひとりげつしやうはがのみをもつてかうがいきをとなすきみをあしくをうれふ獨以月性方外之身慷慨唱義愛君憂國』下畧云々とあり、げに月性の忠君愛國其燃ゆるが如き赤誠誰か感泣發奮せざるものなからむ哉。故に月性の其名は年月を経ると伴に世に輝き、以て其人徳を追慕憧憬せしめつゝあり。然るに茲に余の最も遺憾に堪ざるは世人多くゲツシヤウと呼べば西郷を想起し西郷と云へば薩摩鴻を聯想し、月照即月性(京都清水寺成就院忍向號して月照と云ふ)と誤つて妙圓寺月性の何者たるやを知らざる傾あり、蓋し無理からざる理由ありとす、然れども今是を明らかにする違なし。加ふるに彼の世界的大戰亂終熄後歐米の思想界に一大動揺を來し怖る可き惡思潮は滔々として我が東洋の地に押寄來る、爲に我が國の思想界又大に動揺し、往々にして心膽を寒からしむる問題を惹起せるあり、此の秋に當り月性の如き勤王憂國家の大精神を廣く天下に紹介し以て思想の善導に資せんと欲す、是れ月性の後世住職たる余の月性に對する孝道にして

且つ又住職たるの責任と信ず、門徒亦然らざる可からずと思惟するものなり、爰に於て余は或る動機と援助の下に月性の一代活躍を活動寫眞となし、兩月性、月照の人物を明かならしむると同時に一面之が思想善導の資にも供せんと欲して本會を組織するものなり、希は門徒甫め有志諸彦余の意を諒し余をしてコノ目的を遂行せしむ可く、可及的應援あらむ事を切望して已まざる次第也。

(大正十二年)

各位

